

〔動物〕 ネコ、雑種、雄、1歳4カ月

〔臨床事項〕 本症例は猫伝染性腹膜炎ウイルス(FIPV、C3663株)の感染実験において、ウイルス接種群として実験に供された個体である。6カ月齢および10カ月齢時に経口によりFIPVを接種した。しかし、いずれも血清を用いたPCRでは感染が認められなかった。その後、1歳2カ月齢時に腹腔内へのウイルス接種を行い、再度血清を用いたPCRにより感染確認を行ったが感染成立しなかった。その後特に異常なく、実験計画に則り安楽死後、病理解剖に供された。

〔剖検所見〕 脾臓を含む主要な臓器に著変は認められなかった。また、腹水の貯留等も認めなかった。

〔組織所見〕 赤脾髄は類円形の細胞がびまん性に認められ赤血球に乏しかった。類円形細胞は明るい核と大型の細胞質を持ち、ときに細胞質内に空胞を認めた。類円形細胞には細胞異型および核分裂像は認められなかった。白脾髄には胚中心の形成が認められ、ときに中心部に好酸性物質が沈着していた。また、白脾髄中心部の好酸性物質はマッソントリクローム染色に陽性を示した。免疫染色では、赤脾髄の類円形細胞はHuman Leukocyte Antigen-DR、Ionized Calcium-Binding Adapter Molecule 1 (Iba1)、およびCD204に陽性を示し、von Willebrand Factor、 α -Smooth Muscle Actinに陰性を示した。また、Ki67陽性細胞が散見され、二重免疫蛍光においてIba1/Ki67二重陽性細胞を認めた。提出標本中に、FIPV抗体に陽性を示す細胞は認められなかった。

〔診断〕 赤脾髄における組織球の増生

〔考察〕 本症例はFIPV感染実験に用いられた個体であり、複数回のウイルス接種を受けたが感染は成立しなかった。実験群にはFIPV接種・感染非成立個体がもう一例存在し、その個体の脾臓も本例と同様の組織像を呈した。このため、FIPV接種が組織球増生の誘因となった可能性がある。FIPVに感染すると赤脾髄において組織球が増生することが報告されている。本症例の脾臓でみられた組織球の増生はFIPV接種が刺激となった可能性はあるが、詳細は不明である。

(山田悠介)

〔参考文献〕 Kipar, et al., Vet Immunol Immunopathol. 2006. 112(3):141-155.